

ステークホルダー・エンゲージメント

ステークホルダーとのコミュニケーションを通じての価値創造

azbilグループは、様々なステークホルダーの皆様との対話、建設的なコミュニケーションを大切にし、そこから得られたご意見を経営や事業活動に反映、さらには協働で課題解決に取り組むことで、新たな価値を共創し、持続的な成長につなげていくことを目指しています。地域、国ごとに、課題は様々です。コミュニケーションの深化を通して、こうした多様な課題を的確に捉え、解決策を立案し、持続的成長に向けた価値創造につなげていきます。この観点から、経営層自らもステークホ

ルダーの皆様との対話を積極的に進め、より透明性の高い、信頼感のある関係構築に努めています。ここでは、ステークホルダーの皆様とのコミュニケーション機会、2024年度における活動例をご紹介します。なお、コーポレートコミュニケーション活動は、担当役員の下、社内各部門の連携を図り、ステークホルダーの皆様との対話を促進する体制（コーポレートコミュニケーションタスク）を組んでいます。また、地域社会との対話・貢献についてはアズビル山武財団等とも連携しています。

 一般財団法人アズビル山武財団
<https://azbilyamatake.or.jp>

各ステークホルダーとの対話内容

	お客様	お取引先様・サプライヤー	社員	株主	地域社会・国際社会
コミュニケーションを通じた価値創造	• より良い製品・サービスの開発 • コンサルティング、品質保証、高付加価値なエンジニアリング・メンテナンスサービスの提供	• SDGsを共通目標とした価値共有、社会的責任の遂行 • お取引先様との共存・共栄 • 長期的な信頼関係構築	• 一人ひとりが活き活きとして働き、能力を最大限に発揮できるような「健幸経営」の実現	• 適時・適正な情報開示 • 資本市場からの適切な評価獲得、資本市場の要望のフィードバックによる企業価値向上 • 財務・非財務に関する情報開示	• 地域社会・国際社会の要望に応えるコミュニケーション、社会貢献活動への参加 • 各種宣言、イニシアチブへの参画（責任ある企業活動実践）
コミュニケーション機会	• 営業活動・品質保証活動 • 安全・安心で価値のある製品・サービスの提供 • Webサイトによる情報提供 • Webサイトお問い合わせ窓口 • 展示会・ウェビナー	• サステナブル調達ガイドラインの説明 • お取引先様訪問による、ESG視点での働きかけ・支援 • ESG視点でのお取引先様自己評価アンケート実施とフィードバック	• 会社施策をテーマとする直接的・間接的な対話 • 経営層と労働組合との定期的な対話（経営協議会等） • 社員満足度調査の実施 • 内部通報をはじめ様々な相談ができる窓口の設置	• 株主総会、決算説明会、施設見学会、展示会 • 国内外機関投資家・アナリストとの個別面談 • 個人投資家向け会社説明会 • 統合報告書、ESGデータブック、Webサイトなどでの情報発信	• 季節行事（納涼祭等）や社会貢献プログラム（教育支援等） • 各事業地域におけるボランティア活動 • azbil みつばち倶楽部による支援 • 国際イニシアチブへの参加 • 自然環境保全活動・国内外の関係組織との連携
2024年度の活動例	• Industrial Transformation ASIA-PACIFIC、計測展2024 OSAKA、スマートビルディングEXPOほかに出展、DXやAIを活用した先進的な製品・サービスをご紹介	• サステナブル調達ガイドライン説明会にお取引先様255社参加 • お取引先様訪問による支援・ダイバーシティ推進提案・CO₂排出量削減支援 • お取引先様の人権侵害リスク評価・改善依頼を実施 • 発注価格・取引適正化協議を実施	• 経営層とazbilグループ社員との直接対談 • AIでそうそうコンテスト • 社員株式給付制度（譲渡制限付株式）等のインセンティブ・プランの導入、社員への制度導入意図・内容説明会の実施 • 大阪・関西万博に参加する社員への支援	• 決算説明会、株主総会を会場・オンラインのハイブリッドで開催 • 経営層を含む国内外機関投資家との面談実施 • 社外取締役と投資家との対話（スモールミーティング）実施	• 人権尊重の取組みに関する人権専門家・人権NPOとの対話実施 • 湘南ユナイテッドBC・藤沢市、アズビル山武財団と子ども向け車いすバスケットボールイベント共催を継続 • 2025年大阪・関西万博のテーマウィーク協賛 • 環境の取組みに対する第三者ダイアログ実施

2025年
大阪・関西万博の
テーマウィークに協賛

オートメーションでつくる未来のちょうどいい暮らし



栗田 朝可

通常業務：電気回路設計者として
工場向けフィールド機器の設計・開発を担当



藤瀬 光香

通常業務：全社開発部門にて
光応用計測・化学応用計測技術の開発を担当



植岡 昌治

通常業務：工業市場向けフィールド機器の
商品企画を担当

アズビル株式会社は2025年大阪・関西万博のテーマウィークに協賛しました。2025年5月の「未来のコミュニティとモビリティ」のテーマウィークでは若手社員が主体となってトークセッションを開催。「オートメーションでつくる未来のちょうどいい暮らし」をテーマに掲げた本イベントには、準備を含めて多くの社員が参加し、大きな反響を得ました。その過程と手応えを、3人のメンバーが振り返ります。

「azbilらしさ」をいかに表現するか

藤瀬 当時、私はまだ入社3年目だったのですが、万博プロジェクトメンバー募集のメールを読んだ時、詳しい内容はさておき、とにかく「やってみよう」と手を挙げました。自分の人生の中でも特別な体験を得られると思ったからです。

栗田 私も同じです。万博がこの日本で開催され、自分のいる

会社が協賛しており、それに参加できるなんて。立候補しない理由はありませんでした。

植岡 栗田さんは、当時まだ2年目でしたよね。

栗田 そうです。本配属から1年も経っていない頃で、上司にほとんど事前に相談せずに参加を決めてしまいました。植岡さんは、そんな私たちのサポート役として選抜されたんですよね？

植岡 若いメンバーだけだとアイデアが飛躍しすぎる可能性があるのですが、ブレーキ役といった意味合いもあったのかもしま

せん。ただ、こんな機会は二度とないと感じたのは二人と同じです。どうせやるなら自分も楽しんで、たくさんのことを学ぼうと思いました。

藤瀬 正直、ここまで裁量を与えてくれるとは思っていませんでした。唯一の縛りといえば、万博のテーマウィークスタジオでトークセッションを行うことが決まっているだけ。いくら自由にやって良いと言われても、世界中の誰でも視聴できるイベントなので、そのプレッシャーは大きかったですね。トークテーマは何がふさわしいか、どんな方々をゲストにお迎えするのか、アズビルとしてどんなメッセージを発信していくべきか。人生でこれほど悩んだことはないというくらい悩みました。その後、「オートメーションでつくる未来のちょっどいい暮らし」というテーマでイベントの構成を考え始めたんですけど、筆がまったく進まず……。本当にもどかしかったですね。

栗田 いつも明るく前向きだった藤瀬さんが、減入っていた時期のことをよく覚えています。そんな時こそチームの力、藤瀬さんの分まで頑張ろうと、余計に気合が入りました。

植岡 二人が苦しみの末に出してきたアイデアを、チームで議論して、修正を重ねて、一つのイベントに磨き上げていきました。その過程では、二人ともまったく妥協しませんでした。だからこそ、自信を持って本番を迎えられたんだと思います。司会の藤瀬さんと栗田さん、そして素敵なゲストモデレーターの方。この三人の軽快なトークに引き込まれたのか、ゲストスピーカーの皆さんの発言にも自然と熱がこもっていたように思います。当社らしさも随所に盛り込まれていて、極めて内容の濃いイベントに仕上がったのではないのでしょうか。

若手の挑戦が、組織の空気を変えていく

栗田 トークセッション本番の直前に開催した社内イベントでは、実際に会場に来てくれた社員が150人、オンライン生配信を視聴してくれた社員が450人。5,000人以上いる国内グループ社員のうち、約600人がリアルタイムでイベントに参加してくれたと思うと、なかなかの人数です。社員のみんなにも、万博を好きになってもらいながらこれから開催されるトークセッションについて知ってもらおう、という気持ちで取り組んだので、反響が大きくてとてもやりがいがありました。

万博でのトークセッション本番のオンライン生配信も多く仲間に見てもらえたみたいで、当日会場にいた経営層をはじめ、イベント後もいろいろな部門の人からうれしいコメントをたくさんもらいました。社員の中には「アズビルは縁の下力持ちだから」とか、「主役になって目立たなくても良い会社だ」といった固定観念を持っている人もいるかもしれません。しかし、著名なタレントさんや有識者の皆さんと私たちが堂々と渡り合っている様子を見て「主役にもなれる会社」なんだと、多くの社員が感じてくれたのではないのでしょうか。

植岡 若手だからこそその思い切り、勢いを見事に見せつけてくれましたね。実際、私自身も二人の挑戦を近くで見ていて、かなり感化されました。私が身を置くマーケティングの領域は、ある程度の経験が求められるので、必然的に部員の年齢層も高くなりがちです。しかし、同じような人が集まる場では、やはり同じようなアイデアしか出てこない。もし、二人のような感性を持った若手の力を活かせたら、きっと新しい何かを生み出

せる。そう思わせてくれた活躍ぶりでした。

藤瀬 今回のトークセッションをきっかけに、他の若手社員が「自分も新しいことに挑戦してみたい」という気になってくれたなら、それだけでも、私たちの挑戦には十分な価値があったと感じます。また、今回の経験を通じて、「自分自身が貢献できる未来」を現実的に考えるようになりました。未来は「今」の積み重ねの先にあり、成果がすぐに見えなくても、地道に取り組んでいけば価値ある技術を生み出せるはず。目先のことだけでなく、長期的な視点で未来を考える必要があると、改めて認識しました。

植岡 世の中に新しい技術が生まれると、技術を活用することが目的となりがちです。でも、それは本質ではない。大切なのは、新しい技術を使って人々にどのような価値を提供できるか。AIでは気づけない、人々の暮らしにとっての本質的な価値。それが、「未来のちょっどいい暮らし」の中にあるのだと思います。未来の社会を具体的に想像し、その実現に向けて今やるべきことを考える。今回の挑戦は、その起点となる経験になったと思います。



トークセッションでは司会を務めた